

バウムテストの空間使用数に示される高齢者の抑うつに関する諸特徴

順天堂大学大学院  
スポーツ健康科学研究科  
学籍番号：4119045  
氏名：山田 玄太

【目的】

バウムテストで描かれた木の空間使用数が、高齢者の抑うつに関する諸項目をそれぞれの程度反映しているか、統計的に検討した。

【方法】

65歳以上の高齢者238名を対象に、年齢、性別、教育年数などの個人属性のほか、老研式活動能力指標、quality of life (QOL) 評価表、日本老人における老人用うつスケール短縮版 (GDS-15) への回答を求め、さらにバウムテストを実施した。バウムテストで描かれた木の空間使用数を測定し、各質問紙法検査の各項目との相関係数を算出したほか、重回帰分析を行った。

【結果】

スピアマンの順位相関係数では、空間使用数と、年齢、教育年数、老研式活動能力の合計点および下位項目（手段的自立、知的能動性、社会的役割）、QOL 評価表の合計点および下位項目（現在の満足感、生活のハリ）、GDS 短縮版の合計点および下位項目（うつ気分、エネルギー減退）において有意な相関が得られた。バウムテストの空間使用数を従属変数、他の項目を独立変数とした、ステップワイズ法による重回帰分析を行なった結果、QOL 評価表の生活のハリ、GDS-15 のうつ気分、老研式活動能力の手段的自立の3項目が、有意な項目として選択された。

【結論】

高齢者が描く木の空間使用数には、うつ気分に加え、生活のハリや、手段的自立といった項目が反映されていることが示唆された。